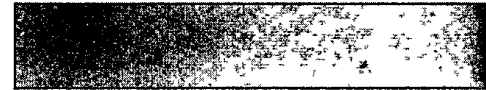


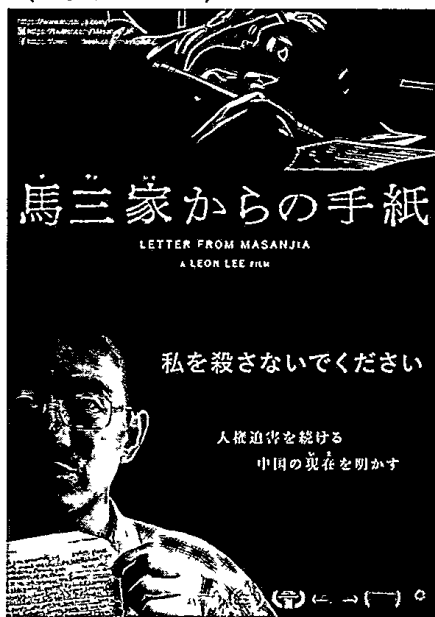
# 西川伸一の オススメシネマ①①



二〇一二年一〇月にアメリカ・オレゴン州に住む女性が、ハロウィン用の飾り物が入った段ボールを開けた。すると中から英語と中国語で書かれた手紙が飾り物にまぎれて出てきた。それは中国・遼寧省瀋陽市にある労働教養所の入所者が命がけでしたためたものだった。労働教養所の実態を告発し、手紙を人権団体へ転送してほしいと求めていた。

## 馬三家からの手紙

(カナダ・2018)



の労働教養所に送られたのだった。二〇〇八年から約三年間そこで塗炭の苦しみを味わったカナダ在住で中国の人権侵害を取り上げてきた映画監督のレオン・リーは、暗号化されたスカイプで孫毅と連絡をとり、映画づくりをもちかける。孫毅はそれに応じて、リーから撮影のノウハウを教わる。そして、カメラをもつて労働教養所のあった馬三家を訪ねて撮影を敢行する。

あるいは、彼を拷問した元看守たちにも会いに出かけて、笑顔のツーショットを映像に収める。元看守とて好きこのんで暴行していたわけではない。やらなければ、自分が上司から苛まれるのだ。元看守たちは堂々と顔を出して、過去の蛮行を涙ながらに懺悔する。後事が心配になった。

女性は戸惑いながらもその指示に従った。やがてそれは全米で大きく報じられ、労働教養所で日常化していた拷問や虐待は国際的に強い批判にされされることになる。中国は二〇一三年一二月にその廃止に追い込まれた。その過程で手紙の書き手は孫毅という男性であることが判明する。彼は「法輪功」の活動に加わっていたかどで、当局により拘束され馬三家

がスケッチしたものが映画内ではアニメーション化されて再現される。一つのベッドを二人で頭と足を互い違いにして眠る。夜通しの作業ではうとうとすると看守から電気ショックを受ける。孫毅はベッドで何十通もの手紙をつづり、作業の休憩時間中にこっそり箱にしのびこませる。あるとき、その手紙を床に落としてしまい看守にみつかる。看守はだれの仕事かつきとめ

るために収容者を次々に拷問にかける。手足を縛って吊し上げ、眠りに落ちて膝を曲げると激痛が走り目が覚める。孫毅にはこれが何日も続けられたが、とうとう口を割らなかつた。とはいえ、孫毅は決して屈強な体つきではなく、拷問に耐え抜いた闘士というイメージからはほど遠い。華奢で物腰穏やかな中年である。どこにそんな胆力を秘めていたのだろうか。

出所後も孫毅は当局にマークされ行動や生活を妨害される。そこで二〇一六年一二月に孫毅は中国脱出を試みる。当然パスポートをチエックされ頓挫すると思いきや、あっけなく成功する。そしてインドネシアに滞在して、亡命申請が許可されるのを待つ。そこへオレゴン州の女性が訪れる。この場面だけは心が和んだ。

映像はここまでである。その後は字幕で説明される。それが衝撃的だった。やがて孫毅は中国当局者の接触を受ける。そして二〇一七年一〇月に孫毅はバリ島で「病気」のため急死してしまふのだ。孫毅に病歴はなく怪死である。

参考文献：古谷幸一「新龍中国(19)『馬三家からの手紙』監督インタビュー」『週刊金曜日』二〇二〇年三月二十七日号。

(二〇二〇年三月二十七日・新宿K's cinema)  
(にしかわ・しんいち/明治大学教授)